

札幌市内で道内初のデング熱感染者が3日確認されるなど国内での感染拡大が続いている。感染者は4日までの厚労省のまとめで11都道府県の計48人。帯広畜産大学の専門家によると、現時点で道内には、デング熱を媒介する蚊の生息は確認されておらず、十勝で感染が広がる可能性は極めて低い。ただ、札幌の感染者が蚊に刺された東京・代々木公園や周辺など感染源とされる場所を訪れる際には、肌の露出を避けるなど対策が必要になる。

デング熱のウイルスを媒介するヒトスジシマカ。黒と白のしま模様が特徴(国立感染症研究所昆虫医学部提供)



## 札幌でも確認「デング熱」

# 「管内感染」リスク極小

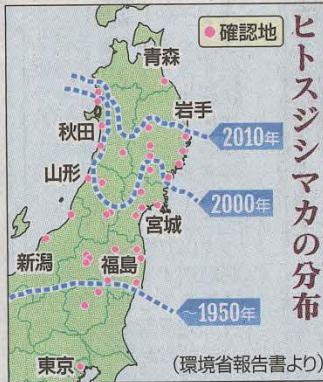
デング熱は人から人にはうつらず、蚊がウイルスを媒介する感染症。熱帯・亜熱帯地域を中心に流行しており、発症すると、38度から40度の発熱、発疹、頭痛、関節痛、嘔気(おうぎ)、嘔吐(おうと)などの症状が出る。通常は1週間以内に解熱する。

帯広畜産大学研究センターで蚊を媒介する感染症を研究する福本晋也准教授は、道内にはデング熱のウイルスを媒介する「ヒトスジシマカ」の分布が確認されていないため、「十勝でデング熱が広がることはゼロに等しい」と指摘する。

十勝には数種類のヤブカが生息し、白と黒のしま模様を持つヒトスジシマカと見ただ目がつくりな「ヤマダシマカ」もいるが、デング熱の媒介能力はない。ただ、地球温暖化などの影響に伴い、媒介する蚊の生息区域は年々北上。国立

感染症研究所(東京)によると、2013年時点で青森県以南の全国各地で広く分布が確認された。福本准教授は「数百年後には、道内・十勝管内まで生息域が拡大する可能性がある」と危惧する。また、媒介する蚊の成虫

## 媒介蚊 生息域に注意 露出避け 虫よけ対策を



デング熱の国内感染 東京・代々木公園を訪れた女性の感染確認(8月27日)を始まりに全国で感染者が出ている。国内感染はおよそ70年ぶり。海外旅行の帰国後に発症するケースでは、年に100〜250人程度の感染者があり、道内の感染者は2011年に10人、12年に5人、13年に4人、14年に2人。帯広保健所管内では過去に感染を確認した記録はない。

は越冬できないため、感染は今年度中に収束するとみられるものの、「沖縄などの暑い地域に感染者が訪れた場合、媒介する蚊により感染が続くことも考えられる」(同准教授)という。デング熱には有効なワクチンがないため、予防方法としては蚊に刺されないようにするしかない。蚊の寿命は30日程度で、1匹の蚊が吸血する回数は3〜4回程度。媒介する蚊はいずれも口中活動するので、媒介蚊がいるような地域に行く

場合は、日中は肌の露出を避け、虫よけ剤を使うなどするとよい。今回の集団感染を受け、道は8月29日以降、全国の感染情報を各保健所を通じて医療機関に通知している。感染者を確認した場合、速やかに届け出るよう呼び掛けている。早期発見・治療につながるよう9月1日からは、これまで国立感染症研究所だけで行っていた確定診断を、地方衛生研究所でもできるようにした。(高津祐也、丹羽恭太)